# 本を選ぶ
## 高校図書館版

NO.46 2008年(平成20年)11月10日
http://www.las2005.com

●発行／ライブラリー・アド・サービス
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 5-20-5-504 TEL=03-3235-6168


ろん・ぽわん

### 素材を探す

神奈川県国語部会の委員として、「県下一斉テスト」づくりに関わるようになって、十年近くになります。大学入試の過去問などを利用してつくるわけではないので、私たちの仕事は「素材」（問題にする文章）探しからはじまります。小説、評論から古文、漢文まで、その時期、というか県一テストは年に二回実施しますので、結局一年中、私たちは良い素材を探して、本屋さんや近所の図書館、そして学校の図書館をうろうろしています。

素材選びにはさまざまな制約があります。高校生対象のテストなので、たとえば小説なら、大人の恋愛や殺人事件という内容は不適切。ファンタジーや推理小説は問題をつくりづらい。設問にできるような表現が数箇所あるかどうか。教科書に掲載されていないかなど。でも私たちにとって一番大きな制約、というか私たちが一番こだわっていることは、「自分が読んで良いと思えて、高校生にも是非読ませたいと思える文章かどうか」です。

だから、つい手に取ってしまうのは、重松清、阿部夏丸、伊集院静、佐藤多佳子……。少年少女が主人公の物語や、中学校や高校を舞台にした青春小説ばかり読んでいます。『エビスくん』(重松　清著『ナイフ』新潮社　所収）は何度読んでも感動するし、『一瞬の風になれ』（佐藤多佳子著　講談社）のゴールシーンには、思わずまぶたの裏を熱くしました。

今年、国語部会の関係で高校の司書さんと一緒に仕事をする機会がありました。仕事の合間にこんな話をしたら、いきなり怒られました。「どうしてそういうことを早く教えてくれないのっ！　県下一斉テストをつくっている先生たちがそんなことを考えていたなんてぜんぜん知らなかった。目指していることは私たちと一緒じゃないのっ！」って。そういえば、これまで「これ良い！」と思って問題に使った素材の多くを見つけたのは、本屋さんでも近所の図書館でもなく、勤務している学校の図書館でした。

私たちがひとつの問題に使えるのはせいぜい二千五百字程度。短編小説でない限り、全体を読ませることはできません。しかも、問題に使ったのは喧嘩の場面でも、その後に感動的な友情の深まりがあったり、ラストシーンが泣かせるのに、前半で問題をつくらざるを得なかったり、「ここを読ませたい」と思う一番良いシーンでは問題をつくれないことがしばしばです。

だからこそ、こんな場面を空想するのです。テストが終わった後に生徒が学校の図書館に行く。何となく書棚を見たあと司書さんに、「いま受けた国語のテストの問題こんな話だったんだけど。なんかちょっと読んでみたいかなって思って」。すると司書さんが、「あるよっ！」って、ドンッ！　とカウンターにその小説を出してくれる。

かつて県一テストを受けた生徒が、「先生、きょうのテスト、読んでて泣きそうになっちゃって、問題が解けなかったよ」と言ったとか。そんな問題づくりを目指して、私たちの仲間はきょうも学校の図書館をうろついています。

（米川　好一：神奈川県国語部会）

# 十分間一本勝負！ ～ＳＨＲにおける読書活動の取り組み～

朝倉 久美

朝の教室訪問ブックトークを始めて、早くも５年目を迎えました。一日の始まりを包む慌ただしくも爽やかな空気の中、本を抱えて歩く私を見て「ブックトークだ」とささやき合う生徒たち。チャイムの音とともに、教室の後ろへそっと移動する担任の先生。教壇で生徒の顔を見渡しながら、私はいつもこれらの風景が自分の体に馴染んでいることを少し不思議な心持ちで眺めるのです。

それではこの場をお借りし、学校司書として館外活動に「ショートホームルーム（ＳＨＲ）でのブックトーク」を選んだ理由と、定期実施に至るまでの経緯を中心にご紹介したいと思います。

## 「司書配達サービス」の開始

この仕事を始めて 10 年あまりになりますが、いつも思うのは「学校司書」という立ち位置の微妙さです。行政職でありながら教育活動に関わる部分が多く、かといって教員と同じスタンスではない。授業に使う本を集めたり、調べ学習の補佐をしたりという授業支援の形は定着していたものの「こんなことお願いしていいんでしょうか……」なんて遠慮しながら相談に来られる先生方の姿を見るたび、図書館側からもささやかなアプローチがあった方が安心してもらえるのではないかと考えました。また、なかなか見えにくい「司書の仕事」を広く理解してもらうには、既成概念に囚われず（もちろん職務を逸脱しない範囲で）新たな可能性を自ら開拓していく必要性を感じました。

その手始めとして、教員向け図書館だよりに『司書配達サービス』という一文を掲載したのが平成 14 年度末です。「お電話一本で司書をお届けします。メニュー応相談」という小さな囲み記事でしたが、卒業間際の３年生の授業を中心に何度か声をかけていただき、読み聞かせやブックトークを行いました。それにあわせて、15 年度入学学年の担任団から「新学年では積極的に読書活動を取り入れたいので協力してほしい」という依頼を受け、年間通して「朝の読書」の準備やＬＨＲでの読み聞かせ、アニマシオンなどを実施しました。その中で特に印象的だったのは、朝のＳＨＲ読書が終わったあとの生徒たちの落ち着いた姿です。そこで、この時間を使って「朝の読書」以外の読書活動も何かできないだろうかと考え始めました。

## 朝の定期訪問へ

ちょうどその頃、以前から図書館活動に関心を持ってくださっていた先生（16 年度入学生の担任予定）からお話をいただき、入学当初よりその先生の教室でＳＨＲブックトークをやってみようという計画が持ち上がりました。８月と３月を除いた計 10 回の予定で、最初なのであらかじめテーマリストを作って先生に目を通していただきました。その成果や反省をふまえ、翌年度はそのクラスを含めた２学年全クラスでの実施に踏み切ることになりました。一学年４クラスなので、毎週交代で教室に出向きます。回数こそ増えたものの同じテーマを４回行うので、準備の時間は変わりません。ブックトーク２年目のクラスもありますので（なにより私自身が飽きないように）意外なテーマを設定したり、小道具や音楽を取り入れたり、何度かは絵本の読み聞かせも行いました。一昨年度には現任校へ転勤しましたが、当時新学年の担任に入っていた司書教諭の先生が後押しをしてくださり、継続して学年全クラスでブックトークと絵本の読み聞かせを行っています。彼らが３年生となった今年は、新１学年でもスタートしました。学年に合わせてテーマや選書を変えながら、毎月８クラスを巡回しています。

ＬＨＲや総合の時間を使っての読書活動に比べ、朝のＳＨＲにはいろいろな制限があります。遅れて入ってくる生徒もいるし、まだ体も気持ちも「聞く」体勢になっていない。しかし、私はやはりこの時間を愛してやまないのです。その理由のひとつは「良

くも悪くも10分間」であること。どんな話の内容であれ、そこそこ集中して聞いてもらえるのは10分が限度ではないかと思っています。多少失敗しても「やり逃げ」ができ、お互い気持ちの切り替えもスムーズ。実施時間が短いので、準備も苦になりません。逆に、たった10分だからこその真剣勝負なので気合いも入ります。もうひとつの理由は、先生方の中に「朝の読書」という言葉が浸透してきていること。始業前の読書活動に抵抗のない先生が多く、総じて好意的に取り入れてくださいました。心配な生徒の様子をそっとうかがったり、こっそり書名をメモしている姿などを目にするたび、先生や生徒と教室の空気を共有できる喜びを感じます。

同じ学校、同じ学年でも、クラスによってまったく反応が違い、同じ本を選んでも決して同じ展開にならないのがブックトーク。教室の雰囲気を見ながら本を入れ替えたり、担任の先生と相談しながらテーマを決めることで、最近は「今、このクラスに必要な一冊」を考えながら本の選定をするようになりました。これもまた、教諭と司書との協働といえるのかもしれません。

### そもそも、ブックトークとは？

SHRの読書活動としてブックトークを選んだのは「時間が調整しやすい」というのが第一の理由です。しかしいざ始めてみると、嬉しいオマケがたくさんついてきました。まず、ブックトークで扱ったテーマがそのままコーナー作りに使えること。終了後に館内に並べるだけで、あっという間に特設展示のできあがりです。また、ブックトークの記録はレファレンス用のストック作りにもつながりました。

そもそもブックトークは「ひとつのテーマに沿って／数冊の本を順序だてて／ストーリー性を持たせながら／紹介する」ことで、そこには柔軟な発想力、蓄積した情報、ストーリーテリング能力、図書館への導きといった「図書館職員として必要な能力」が総合的に求められます。いわば、司書として培った経験をすべて生かすことができる図書館活動ではないでしょうか。地域の研究会では司書全員がブックトークの実演を行い、先輩方の様々な技術に触れることができました。その中で自分らしい形を模索し続け、今日に至ります。

いわば図書館は、利用者数百人対数万冊という圧倒的な売り手市場の合コンです。相手（本）が多すぎて迷ってしまう生徒たちに、出会いの場所をプロデュースするのが司書の役割。ブックトークの準備は「五枚のお見合い写真を持って行く」気分で本を選びます。結果として、一冊でも気にとめてもらえれば充分。最初は紹介する本の冊数を増やしたり、早口で情報量を多くしたりと欲張ってしまいがちでしたが「いい本だから読ませたい」という押しつけが図書館職員のエゴにほかならないと気づいてからは気持ちに余裕ができました。これはこの仕事をしている以上、常に陥りやすい罠であることを肝に銘じたいと思います。

### またこの時間、この場所で

ブックトークも読み聞かせもアニマシオンも、読書活動としては目新しいものではありません。しかし、どんなに研究しても学校に実践の場がないという話もよく聞きます。私がSHRでの活動に踏み切れたのも、新しいことに取り組む実験が許され、かつ継続させてもらえる環境に恵まれたことが大きな要因だと思います。最初にブックトークを始めた前任校も現任校も、生徒数400人ほどの小規模校です。当然職員の数も少ないものの、全体で協力し合ってそれぞれの活動をサポートしていく空気がありました。実際のところ、その学校その学校の事情や方向性に則した図書館活動が望まれるはずですし、今後ずっと続けていけるとは限りません。そのためにも様々な実践に触れて、多くの活動材料を見つけていくことが今後の課題です。

一年間のブックトークが終わると「今年のブックトーク一覧」というプリントを生徒に配ります。そこには「少なくともみなさんは一年間で●冊の本を最後まで読み、●●冊の本と触れ、100分の読書時間を持ったのです。誇りにしてください」というメッセージを添えています。たった10分、されど10分。どこまで積み重ねていけるかはわかりませんが、先生や生徒と作る朝のひとときを、これからも楽しんでいきたいと思っています。

（あさくら くみ：県立高等学校司書）

# 生徒の夢を叶え、地域と共に進む学校
## —三重県立相可高等学校—

河北　冠

### はじめに

本校は、明治40年に創立された歴史の古い学校で、昨年（2007年）の10月には100周年記念式典が実施された。

現在の学校規模は、1学年で普通科が3クラス、生産経済科が1クラス、農業土木科が1クラス、食物調理科が1クラスの計6クラス、生徒総数720名余りの総合高校である。

本校は、三重県多気郡多気町という人口約1万6千人の町にあり、三重県のほぼ中央にあたる。多気町にはシャープ多気工場があり、町の活性化に大きく貢献している。また江戸時代の国学者として活躍した本居宣長や、松阪牛で有名な松阪市に隣接している。校舎のすぐ後ろに、清流で名高い櫛田川が流れ、周辺を田園地帯に囲まれた実にのどかな環境の中にある。

本校では「生徒の夢を叶え、地域と共に歩む学校」を基本理念に掲げ、四つの学科が、地域と連携した特色ある教育活動に取り組んでいる。本校の教育活動の大きな特色は、地域連携であり、地域との連携を大切にしている。地域から「愛され」、地域から「信頼され」、地域から「必要とされ」る学校を目指している。

### 各科の取り組み

各科の取り組みの中から、特色あるものをいくつか紹介する。

普通科では、学校近隣にあるシャープ多気工場の協力を得て、2003年から、「スーパーサイエンス講座」と称する出前講座を実施（年間3回）している。シャープ多気工場から技術者の方に来ていただき、1学年の理数系志望の生徒たちを中心に、シャープが世界に誇る液晶や太陽光発電等の最先端技術について学んでいる。携帯電話や液晶テレビの仕組みなど、生徒の関心も高く、毎回熱心に取り組んでいる。また年間1回は、現場研修として工場の見学もさせていただき、世界の最先端を誇る科学技術を目のあたりにして、生徒たちの科学に対する好奇心を駆り立てている。

生産経済科では、県内の農業高校に先駆け、1997年頃から園芸福祉に取り組んでいたが、その取り組みが評価され、2004年に「初級園芸福祉士養成講座モデル校」に選ばれた。地域の福祉施設（養護老人ホーム等）や幼稚園・保育園と連携して県内の農業高校における園芸福祉のパイオニアとして頑張っている。

園芸福祉というのは、花壇作りやハーブを利用したポプリ、フラワーアレンジメントなどを生徒と高齢者や園児たちとが一緒に行い、心身とも癒され、より健康で幸福に生きることを目指す取り組みである。初級園芸福祉士の資格取得には毎年2年生が挑戦し、ほぼ全員が合格している。卒業後、その資格を生かして、福祉施設等に就職する生徒も増えている。2006年の12月には、全国でも珍しい高校生によるＮＰＯ法人「植える美ing」を設立し、さらに幅広い活動を目指している。

また本校は、松阪牛生産地のほぼ中央に位置し、松阪牛の3年肥育に取り組んでいる。1年生の時に子牛を仕入れ、3年生の時、出荷をする。毎年、地域の松阪牛肥育農家が参加して開催される「松阪牛共進会」にも出品し、2007年に開催された共進会では、本校から出品された一頭（きくよし号）が757万円という高額で競り落とされた。マスコミ等でも大きく紹介されるなど大きな話題になった。

農業土木科では、公務員を希望する生徒が大半を占め、測量士・測量士補・土木施工管理技術等の資格取得に力を入れている。測量士の国家試験では、17年度は19名、18年度は14名、19年度は25名の合格者を出し、高校生の合格率では、ここ数年、全国一の実績を上げており、例年、県外からもいくつかの高校が視察にみえている。

食物調理科は、調理師コースと食文化コースに別れている。調理師コースは、卒業時に調理師免許が取得でき、社会の即戦力となる人材の育成を目指している。食文化コースは、製菓を中心にフードビジネス・調理・情報など時代のニーズに対応できる人

材の育成を目指している。また、希望生徒は製菓衛生師の国家試験受験資格も取得でき、多くの生徒が受験し合格している。






「まごの店」外観と店内の様子

食物調理科の地域と連携した特色ある取り組みの一つが、「まごの店」の取り組みである。「高校生のレストラン」としてテレビや新聞等のマスコミでも何回か紹介され、全国的に知られるようになった。この施設は、本校調理クラブの実習施設で、農村活性化事業として町内に設立されていた遊園施設「五桂池ふるさと村」の中に、多気町のご協力を得て、2002 年に設置されたものである。地元の農家の人たちが参加する「おばあちゃんの店」と称される農産物直売施設の前に設置されたことから、「まごの店」と名付けられた。設立当初は屋台風の収容人数十数名の小さな店舗であったが、高校生のお店ということで話題を呼び、次第にお客さんも増えてきた。そのため 2005 年２月に、多気町と県の協力を得てリニューアルされ、客席 50 人を有するモダンな本格的なレストランに生まれ変わった。この建物のデザインは、県内の建築科のある工業高校の生徒たちに呼びかけ、応募した生徒たちの作品の中から選ばれたものである。高校生が調理する建物を、同じ高校生がデザインするという非常にユニークな発想のもとで作られ、大きな話題となった。

この施設では、仕込みから調理、サービスに至る全ての運営を生徒自らが行っている。また、地産地消の取り組みということで、食材の多くは「おばあちゃんの店」で仕入れた材料が使われている。まごの店の営業は学校のない土・日曜日と春期・夏期休業日に限って実施しているが、開店時間前から行列ができる賑わいぶりで、地元の名物の一つになっている。

### 学校図書館からみえる学校

それぞれ特色のある４学科に所属する生徒が、毎朝共通して取り組んでいる＜朝の 10 分間読書＞。毎朝授業が始まる前の 10 分間、生徒と先生がそれぞれに自分の好きな本を黙って読む時間は、それぞれの目標をもって活動的に取り組む生徒たちにとって、静かに自分と向かい合える時間となっているようだ。日常的に読みたい本を探すため図書館を利用する生徒も多く、本屋で見つけた今話題の本には、次々にリクエストが入る。図書館内に設けている＜話題本コーナー＞の棚には、映画・ドラマの原作本や、いったん＜新着本コーナー＞に置かれ、この棚に移動したリクエスト本が更新されていく。図書館に来たほとんどの生徒が立ち寄る棚で、読書が苦手な生徒にも本を親しんでもらいやすい棚にしようと心がけている。また、図書館を使った授業では、教科担当教諭と学校司書が連携して、詩の暗唱やブックトークの授業が行われている。学校司書の実践発表の後、教科担当教諭が示すスケジュール内に、生徒自らがそれぞれ図書館で本を選び、詩の暗唱発表やブックトーク発表をしていく。その他、専門学科による調べ物学習が行われることもある。『社会園芸学のすすめ』（農山漁村文化協会）、雑誌「土木技術」（土木技術社）、『シュガークラフトバイブル』（柴田書店）などが混在する本棚からは、いつも生徒の頑張りを感じる。

### さいごに

本校の各学科が、今、このように特色ある取り組みができるのは、地域からの温かい応援があるからである。地域の力で生徒たちが成長し、その生徒たちが頑張ることで、少しでも地域の活性化に貢献できるのであれば、学校としてこれほど嬉しいことはない。

学校が、地域から関心を持たれなくなったら、充実した教育活動を続けていくことは難しくなり、生徒たちの成長も期待通りにはいかなくなる。地域から信頼され、愛される学校となれるよう、これからも学校をあげて、努力していきたい。

（かわきた　はじむ：三重県立相可高等学校）

# 出前迅速！ 図書館から「とびだす」サービスへ

津谷 知里

私の初仕事である尾鷲高校長島校図書館。統廃合の影響で分校化され、学校司書の配置が危ぶまれる中、何とか今日まで学校図書館としてサービスを展開してくることが出来ました。私が赴任してから6年が経ち、生徒数は36名になりました。来年度が本校図書館活動の最後の年です。

## 「待ち」から「出前」へ

大学を出たての私が赴任した当初、生徒、先生はおろか、学校司書である私自身も学校図書館の可能性に気付いていませんでした。読書習慣がない生徒たち、授業で学校図書館を活用するノウハウがない先生たち、そして「学校図書館って何だろう？」と悩むモラトリアム司書の私という最悪のコンビネーション。大もめにもめて、失敗しまくって、到達した境地が「学校図書館が何なのか、わからないなりに、図書館サービスを学校現場に応じたスタイルにアレンジしてわかってもらおう。学校図書館は便利だと思ってもらおう。そこからだ」ということでした。

まず「図書館で待つ」ことをやめました。図書館だより（は、もちろん作りますが）よりも、一番の広告は学校図書館に携わる「人」自身だと考え、「私が学校図書館の広告塔になる」という意気込みで、先生方への広報物にも「学校司書の活動そのものを教材にして下さい。教室まで出向きます」と書きました。

チャンスをくれた先生の古典の授業（テーマ：浦島伝説）の導入に、絵もストーリーも「いかにも」なステレオタイプの浦島太郎を絵本で読み聞かせしたら効果的ではないかと提案し、それを実現させたのが「出前」サービスの第一号でした。授業当日。教室に突然私が現れたことに驚いたのか、はたまた絵本の選び方が良かったのか、いつもは落ち着きのないクラスが、読み聞かせしている間だけ、水を打ったように静かになり、授業へのスムーズな導入として成功することができました。たまたまその授業が校内の教員に公開されていたことで、その後、他の教員からも授業やホームルーム活動へのオファーを受けるようになりました。「デートDV」についてのブックトークや、「姨捨山」の絵本読み聞かせなど、生徒たちは興味を持って聞いてくれています。授業後は先生方からも「こんな本があるんや」「読んでみたいので貸していただけませんか」などと、評判は上々です。

## テレビショッピング的ブックトーク術

先日、教職員の校内研修会（テーマ：危機管理）でもブックトークをさせていただくチャンスに恵まれました。生徒の前でする以上に緊張しましたが、研修会が終わった直後、次々と紹介した本が借りられていきました。

私はブックトークを始めて3年ぐらいですが、最初のうちはテーマや語りに聞き手の興味は集められても、紹介した本を手に取ってくれる人は稀でした。悩んでいた時、講師（の助手）として参加した県教委主催のブックトーク合宿研修会で「ブックトークはテーマについてメッセージを発信する面もあってよいが、それよりも本の魅力を聞き手にいかに伝えられるか。紹介した本を読みたくさせられるかどうかだ」という話を聞くことが出来ました。「つまり本を売り込むトークライブなのか･･･そうだ！　テレビショッピングのパーソナリティの精神だ」と自分なりの理解（曲解？）をして実践につなげています。テレビショッピングのパーソナリティが強調することと言えば、①この商品がいかにお客の生活に役立つ「使える商品」か　②この商品のどういうところが役立つか、お買い得なのか　③限定品だからお早めに！という3点だと思うのですが、これらのポイントをブックトークに加えていくと、聞き手の「読みたい」「借りたい」に火を付けることが出来ると思います。図書館の本は基本的に「限定1冊」ですし。

地域にも出前します

長島校図書館は１８年度から地域開放を日常的に行っています。地域住民の方が日常的に利用する風景は、もはや本校では当たり前になっています。地域開放の利用者としてやって来るのは、大人や学生だけではありません。小さい子どもたちがお手々をつないで何十人も･･･そう、保育園児のお散歩コースに本校図書館は時々入れてもらっているのです。以前、校内での「どんぐり拾い」のついでにたまたま見学に来てくれた特、絵本の読み聞かせをさせてもらったことが保育士さんの間に広まり、以来絵本の読み聞かせをさせてもらうようになりました。特に３～４歳児のクラスは熱心にやってきてくれています。このスキルを活かして、今年度から地域の公民館図書室の「おはなし会」にもレギュラー出演させてもらっています。絵本や紙芝居を、聞き手の子どもたちの顔を見ながら、そこの司書と相談して即興で選びます。毎回スリリングですが、子どもたちや、付き添いのお母さんの反応が良いと達成感があります。失敗と成功を重ねて、これからも継続していきたい取組のひとつです。

「守ってないね、攻めてるね」

本校は新規採用の教員が多く勤務しています。その先生方にとって「職場として初めて出会う学校図書館・学校司書」であることは責任重大だと思っています。生徒にとってももちろん同様ですが、新規採用の教諭や新卒で本校に赴任された講師の先生にとっては、その後の長い教師生活の中に「学校図書館」が彼らのビジネス・パートナーとして息づくかどうかが、私にかかっているのだ！と必要以上に鼻息が荒くなってしまいます。

そんな気迫が伝わるのか、ある若い先生に「自分が学生のころ利用していた学校図書館は、『待ち』の姿勢の場所だと思っていた。でもここはちょっと違う。いつでも『使ってください』と発信している。『守り』でなく、『攻め』の学校図書館は初めて見た」という言葉をかけていただいたことがあります。「攻め」続けるのがすべての学校において良いことなのか、どっしり「守り」に徹することが必要な学校もあるかもしれない。まだ新人で、一校の経験しかない私には見えていません。でも、学校の中で学校図書館の可能性を伝え続けること、利用者とのパートナーシップを意識し、自覚と責任を持って仕事を続けること、これだけはどんな時でも忘れたくないなあと思っています。

（つや　ちさと：三重県立尾鷲高校長島校司書）

DMかたろぐ




決定版
日本の外来生物
多紀保彦=監修
(財)自然環境研究センター=編著
定価3,570円（税込）

定着すれば日本固有の動植物相に深刻な影響をもたらし、生物群集に遺伝的な改変を与える可能性のある外来生物。「外来生物法」にもとづき、哺乳類から昆虫などの無脊椎動物にいたる動物と植物、計235種類をオールカラーで紹介。豊富な事例も解説。

平凡社 〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4 ☎03-3818-0874 http://www.heibonsha.co.jp/

国別地域別通史の決定版
世界各国史
日本史
宮地正人編
四六判 定価3,885円
第1巻




好評発売中

〒101-0047 東京都千代田区内神田一-十三-十三 電話 03-3293-8131 http://www.yamakawa.co.jp/ 山川出版社

世界史の実像に迫る 好評シリーズ
世界史リブレット 第Ⅱ期 全36巻
A5変型 各巻765円（3月末完結）
※セット受注承ります。セット価格27,540円（税込み）
世界史リブレット 第Ⅲ期 全36巻
A5変型 各巻765円（4月末刊行開始）

第21回東京国際映画祭　コンペティション部門 観客賞&TOYOTA Earth Grand Prix 審査員賞　W受賞!!



11月1日(土)全国ロードショー

ブタがいた教室

妻夫木聡×26人の子どもたち

©2008「ブタがいた教室」製作委員会

話題沸騰!! 問い合せ続々

映画化原案本

命の授業900日

豚のPちゃんと32人の小学生



黒田恭史著　A5判／2100円

好評12刷

ミネルヴァ書房　京都市山科区日ノ岡堤谷町 1　TEL075-581-0296　※価格税込

限りなく広がる知識の世界　辞典700点突破!



動詞・形容詞・副詞の事典

森田良行著　主に動作・作用を表す動詞、性質・状態を表す形容詞、それらの叙述を修飾する働きのある副詞、この三つの品詞は、日本語の表現機能を支える品詞である。本書はその品詞について、語種・分類・文型・用法・特徴・類義語などを語例や一覧表などを掲載して具体的な例文も示しながら詳細に解説した。文法上の特質や役割、日本語の特性を明らかにする。

四六判　292頁

定価2940円(税込)

〈最新刊〉

東京堂出版　〒101-0051東京都千代田区神田神保町1-17　☎03-3233-3741　http://www.tokyodoshuppan.com

レイ・ブラッドベリの絵本

暗い夜が
好きになる
不思議な
スイッチのお話



夜のスイッチ

レイ・ブラッドベリ 文　マデリン・ゲキエア 絵　北山克彦 訳

B5変型48頁／定価●1995円(税込)

晶文社　〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-1-12　電話 03-3255-4501　http://www.shobunsha.co.jp/

短篇小説の快楽【第3回配本】

あなたまかせのお話

レーモン・クノー／塩塚秀一郎訳

人を喰った異色短篇からユーモアあふれる実験作品まで。『地下鉄のザジ』のレーモン・クノーによる軽やかな言語遊戯がつまった本邦初の短篇集！

2415円



★短篇小説の快楽シリーズ

【好評既刊】

『聖母の贈り物』

ウィリアム・トレヴァー／栩木伸明訳　2520円

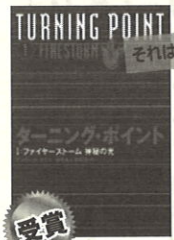
『すべての終わりの始まり』

キャロル・エムシュウィラー／畔柳和代訳　2415円

国書刊行会　〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15　TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427【税込価】

【全3巻予定】

ターニング・ポイント



ターニング・ポイント

それは、地球がまだダメージから回復できる最後の瞬間

ハリウッドが映画化権取得!

環境破壊に警鐘を鳴らす新しい冒険小説

①ファイヤーストーム 神秘の光

②ワールウィンド 運命の嵐

※3巻は09年11月刊行予定

受賞

ア・スクールライブラリー・ジャーナル"Best Book of the Year"受賞作!

デイヴィッド・クラス＝作　金原瑞人・西田登＝訳

A5判・約472頁　●定価1,995円（税込）ISBN 978-4-265-82014-6

岩崎書店　東京都文京区水道1-9-2 TEL.03-3812-9131　http://www.iwasakishoten.co.jp

恐竜イラスト百科事典　小畠郁生監訳　定価9975円

火山の事典（第2版）　下鶴・荒牧・井田・中田編　定価24150円

微生物の事典　渡邊 信ほか5名編　定価26250円

日本中世史事典　阿部 猛・佐藤和彦編　定価26250円

王朝文化辞典　山口明穂・鈴木日出男編　定価18900円

'09総合図書目録あります。ご請求下さい。

朝倉書店　東京都新宿区新小川町6-29　〒162-8707 ☎03-3260-7631